京大生協 らいふすてーじ
2009年3月 教職員特集号

私と京大植物園

大月　健　　農学研究科職員

私が農学部図書室で働くようになったのは1968年である。ぺたりと坐って約40年、現在もやはり農学部図書室に世話になっている。再雇用も農学部図書室を希望しているが、いまださだかではない。

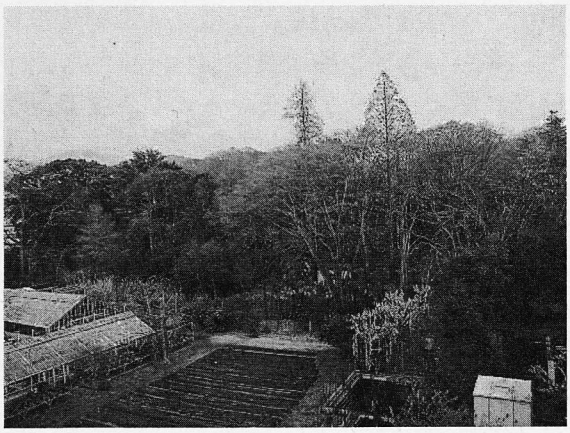
農学部で仕事をするということは北部構内を余り出ない、ということになる。本部構内や総合人間学部構内の喧噪とも無縁である。時間の流れがゆっくりとしている。その感覚は、おそらく視野の広さと緑の多さからくるものなのだろう。圃場とフィールド研森林部の見本園が北側にあり、理学部植物園が東側にこんもりとした〈森〉を形成する。

退屈した時の散歩コースは農学部総合館の東に位置する理学部植物園になる。ふらりと入ってふらりと出てくるのに10分とかからない。「生態植物園」を意図した園内は自然の状態が色濃く残っている。1923年(大正12）に開設されてから約80年、その歴史は樹高の高さがよく示している。落葉樹の多い植物園の様変わりは極端である。鬱蒼とした夏の情景と寂漠とした冬の木立の様相は同一の場所とは思えない。自然の振れ幅ということになるのだろう。

理学部植物園の存在は学内においても認知されていない。そこで「京大植物園を考える会」が生まれた。2003年（平成15）4月に第1回観察会「春の植物園を歩こう」が催され、それ以後毎月観察会が開かれて今年の1月には70回を迎えている。言葉で「多様性」というのは簡単であるが、観察会は実践として京大植物園の多様な側面を拾い上げる。「植物が作る謎の部屋―ダニ室をのぞいてみよう―」から「植物園の苔観察―しゃがんでこそ見える世界もある」、「植物園を含む京大北部キャンパスの地形見学と花折断層」から「トトロをさがそう」まで研究者のその専門性の奥深さを知ることとなる。

植物園の中央に池がある。80年間の堆積物は腰までの泥と化している。「湖の伝説」の画家三橋節子の作品「池畔」(1966年）はこの池が描かれている。父親三橋時雄が農学部教授で節子は植物園を遊び場にして育った。そのイメージが「池畔」として定着する。雑草の多様な色彩も京大植物園ならではのものだろう。日本画家松生歩も池のそばの無患子（むくろじ）と藤蔓の確執を「天へ」「結び」「地へ」の三部作として2007年に発表した。

植物園は大学関係者ならば自由に散策できる。農学部の門を入ってすぐの所に「理学部付属植物園」の古い門柱がある。そこを通路に従って進めばいい。凝縮された四季折々の風景があなたを迎えてくれるだろう。



冬の植物園